

全特協兵庫大会 20240801

特別支援教育の視点を活かした学校づくり

—発達障害を含む障害のある児童生徒への
支援体制の充実を目指して—

関西国際大学 中尾繁樹

今大変なこと

- **コロナ**
だいぶ落ち着いてきましたが、まだまだ注意が必要です。各自の意識が変わります。
- **教育・保育支援**⇒ブラックな仕事?、希望者の減少・給与、待遇、忙しい?、専門性、子ども・先生・親のコミュニケーション、ICTと覚醒・前頭葉機能変化
- **ウクライナ、ガザ、アフガニスタン、シリア……**
- **自然災害**
自分のこととして、捉えよう。⇒今の自分に何ができるか。
一歩踏み出す勇気が必要。

＜学校・幼稚園・保育所等における リスクマネジメントの意義＞

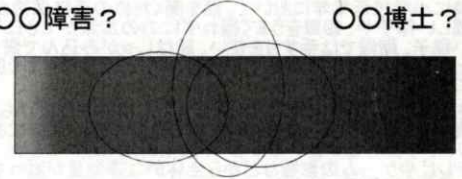
Crisis(危機)	既に発生した事象	既に発生している学習困難、自尊感情の低下、他の事象等に対して、そこから受けるダメージをなるべく減らそうという発想である。⇒ほとんどの学校で取り組まれている実践? 的確な実態把握ができていないための二次的・三次的な問題の防止ができていない
Risk(リスク)	いまだ発生していない危険	これから起きるかもしれない危険に対して、事前に対応しておこうという行動⇒的確な実態把握に基づいた指導体制づくり⇒未然防止

1) 二次障害を予防するための視点
 ① 未然防止のアプローチ ⇒CrisisとRiskを考えた取り組み
 ② 子どもや保護者の尊厳重視のアプローチと教師の指導力・授業力 ⇒実態把握⇒こことからのアライメント ⇒覚醒レベルの向上⇒家庭・学習基盤の確立⇒適応・学習能力の向上⇒自尊感情の向上⇒生きる力の再点火

子どもの特性を知る

• 「障がいとして捉える前にとこが苦手か得意かを知って対応する。」

○○障害? ○○博士?



みんなの特別支援教育とは

- 特別支援教育とは障がいの有無にかかわらず、すべての子どもたちのためにすべての教員がかかわる教育である。
- そのためには、一人一人違う学び方をしている子どもたちを理解し、楽しく「わかる、できる」ように工夫、配慮された授業を行う必要がある。集団の中での指導の個別化。
- 通常の学級における授業デザインをどう組み立てるかは、特別支援教育と教科教育の融合が必要になり、安心して過ごせる学級集団づくりが大切になる。
- すべての教員が特別支援教育を理解し、「わかる授業と楽しい学級づくり」の形成のための研修システムの開発が必要になってくる。

特別支援教育が普及・定着する意義

- いじめ不登校を未然に防止する効果
- 教育的ニーズを把握し、それに対応した指導を行う ⇒ 障害の有無に関わらず児童生徒の確かな学力の向上や豊かな心の育成にも資する
- 教育水準や教員の専門性の向上

⇕

障害の有無に関わらず、誰もが相互に人格と個性を尊重し支えあう共生社会
 ⇒ 特別支援教育の理念や基本的考え方が、国民全体に共有されることを目指す

特別支援教育の視点とは

～特別支援教育の視点を導入する～

- 授業づくりにおいて、特別支援教育が大切にしていることは「個々の子どもの実態把握から、授業をどう作り、どのように展開したいかを考え、授業の中でどんな力をつけさせたいか」ということにつきます。⇒実態把握とねらいの明確化
 - これは、障がいの有る無しにかかわらず一人一人の実態を客観的に見極め、学び方の違う40人に対して、学級づくりや教科教育の中でどのようにわからせるかということになる。⇒ワクワクするドキドキする授業
 - 教師は、子どもたちの一人一人のニーズを受け止め、人間として成長・発達させることが大切になる。⇒個別指導ではない
 - 特別支援教育の視点を取り入れた授業づくりがとても大切になる。
- ⇒特別支援教育の視点とは……実態把握そのもの

実態把握と理解

最近の子どもたちの様子

- 最近の子どもたちを見ていると、「平仮名や漢字がうまく書けない」「姿勢がすぐに崩れてしまう」「休み時間からの切り替えができていない」「人の話が最後まで聞けずすぐ騒ぎ出す」など、学習や規律に関する問題も見られるようになってきました。
- 特に小学校低学年において、話を聞くための姿勢保持が難しい様子や、鉛筆をうまく握れずに力の加減ができにくい様子、階段では手すりを使い、靴はしゃがみ込んで履くといった、身体や運動発達の未熟さを感じる状態を多く目にするようになりました。
- さらに、その要因には現代の子どもたちは乳幼児期から便利なものが増え、身体の軸を作る遊びが減少傾向にあり、小学生も塾や習い事が多く、帰宅時間も遅いことや、テレビやゲームの影響などから全体的な運動量が減っていることがあげられます。

最近の子どもたちの様子

- 児童期から子ども部屋があることにより、親の目から離れ、就寝時間が遅くなっていることや日本人が夜型の生活になり、親に合わせて、子どもたちが遅くまで起きていることも問題としてあげられます。
- これらのことが、子どもたちの睡眠の不安定さを助長し、脳の覚醒レベルを下げることで、不器用な子どもたちが増えたり、行動抑制できなかったりの原因のひとつとして考えられます。

視点①

- 子どもが示す問題は、家庭と学校と社会という器の中で継続的に起こる

子どもの要因(生物学的な要因による障害や疾病)
発達障害(広義)、染色体異常、遺伝子疾患など
家庭の要因(家族・家庭環境など)
子ども虐待、不適切な家庭の養育環境など
学校の要因(友だち、教師、授業など)
いじめ、わからない、教師の問題など

最近の子育ての事情

- 子どものサインに鈍感であったり、わかっていても無視をしていたりという行動が増えてきた
- 例えば、子どもを寝かせたまま哺乳瓶をくわえさせ、片手で携帯に夢中になっているお母さん
- 人はもともと哺乳類
- 哺乳類というのは密着して哺乳をし、育児をする動物
- この密着行動が薄れていくと全体として人に対する興味も薄れていく
- 気持ちが物のほうには向くが、人のほうには向いていない。
- 結果、人を大切にするといい気持ちがもちにくい親子関係ができあがっていく。

視点②

- 「困った子」ではなく「困っている子」
子どもは発達の手を緩めない。
子どもの発達が足踏みするときは大変なことが起きている。
- 子どもの発達を支援するのが「親」「教師」「医師」他
先生・親は子どもとともに発達する。
1982を考える

学校でのアセスメントの難しさ

- 特性より行動に目が奪われる
 - 行動の特徴が目されやすい
- 状態が変化、顕在化する時期
 - 発達障害なのか、環境因子なのか判断しにくい
- アセスメント方法の制約：判断すると言うことは…
 - 短時間で、限定された場所
 - 学校での制約
 - 正常発達範囲の判断の難しさ
- アセスメントの限界
 - 教師の力量不足

早急な専門機関の設置
教師の力量

<子ども理解のためのアセスメントとは>

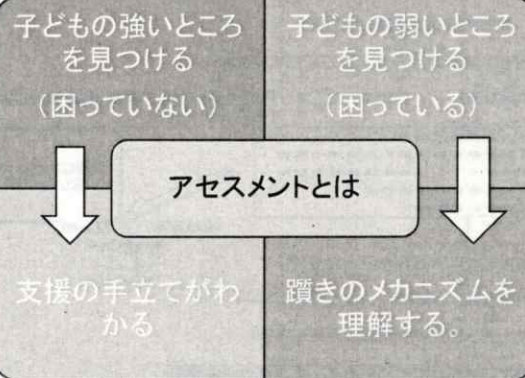
- 子ども一人一人の特性を理解するアセスメントとは、「子どもについての情報を様々な角度から収集し、それらを整理分析して、子どもの実態や全体像を理解していくプロセス」
- 医学的な検査や知能検査だけでなく、学校で見られる子どもたちの行動の様子や学力の状況、家庭環境等を的確に把握し、子どもたちの得意なところと苦手なところを見つけることが大切。
- 子どもたちの得意なところが見つかる指し導を行う上でのきっかけ作りができる。また、苦手なところが見つかる「つまずき」の背景のメカニズムが解明される。
- 教師は結果としての「つまずき」ということだけを見ずに、「なぜできないのか」、「どうしたらできるのか」という観点を持つ必要がある。

子どもの何を見るのか

- 子どもの問題行動はどこにあるのか、減ったのか、増えたのか⇒減っていることの実事と検証⇒先生も子どもも自信
- 授業の質がどう変わったのか⇒授業の展開と工夫
- 先生の意識はどう変わったのか⇒評価と普段の会話の変化、ストレスは？⇒評価はどう変わったのか
- 子どもの実態把握は？⇒把握の手立てを増やす、背景が違ふことを理解する⇒目に見えない部分を客観的に把握する。

アセスメントとは

- 子どもについての情報を様々な角度から収集すること。それらを整理分析して、子どもの実態や全体像を理解していくプロセスのこと。



教師や保育士の困り感

- 子どもの「発達障害」に困っているのではない
- 教師として子どもを指導したり、育てたりすることができないことに悩む
- 「どのように生きてくのだろうか」の心配
- 「親」「教員」「保育士」ともにという確認と労い、敬う
- 親は疲れていても、傷ついていても、感謝もされない理解
- 教師・保育士は疲れているが、傷つくことは少なく、時に感謝される

A小学校の こころと身体の特徴

- 言語量の少なさ
- 覚醒と聴くスキルと姿勢⇒体幹のゆがみ(矢状面、前額面、水平面)C字、低緊張⇒呼吸の調整⇒下顎と舌の位置⇒体力がない、静止動作⇒全員
- 母子分離、母親不安、愛着⇒落ち着かない、無意識部分活動⇒イライラ感、衝動性、自己否定、多動 他
- 幼い、自信がない
- 鉛筆の握り、体幹支持
- ワーキングメモリの低さ
- ゲーム、スマホの過剰⇒睡眠とストレス、ワーキングメモリの低さ
- できた感の低さ⇒自信のなさ
- 左右とルール
- ボディイメージと不器用さ

A小が取り組むこと

- 聴く、話す⇒コミュニケーション、理解、自信⇒ペアワーク、グループワークの活用⇒アクティブラーニングと主体性
- リズム、部活⇒眼球運動とワーキングメモリの改善向上
- 支持力と鉛筆⇒体づくり⇒毎日体操の導入⇒体幹の支持とワーキングメモリ⇒隙間の時間の活用
- 言語量を増やす活動⇒朝の会、終わりの会の利用
- なぜこういった取り組みをするのか⇒結果としての学力向上、怪我の減少、人を思いやる心の育ち
- リラクゼーションの導入⇒呼吸と自己認知
- 子供同士のつながりと先生への信頼⇒児童生徒との会話⇒成功体験と納得⇒授業の改善が一番大切

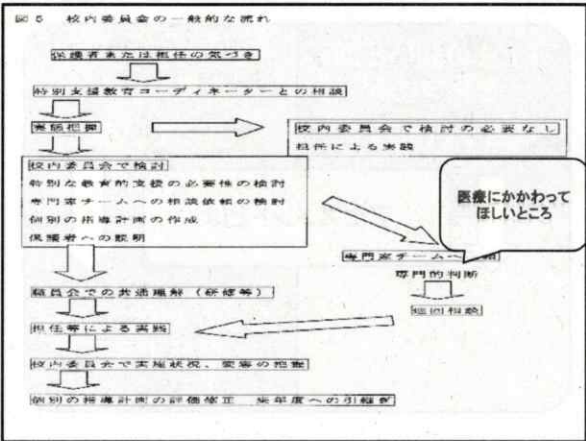
A小が取り組むこと

<授業づくり>⇒面白い授業とは
対応⇒授業の中に自立活動の視点をいれる

- ことばを増やす活動⇒国語⇒言葉を増やす活動とペア
- トークことばを増やす活動⇒社会⇒覚醒を上げる
- 環境整備と授業づくり⇒子どもに合わせたUD
- からだづくりと運動学習と体力⇒かきこい体づくり⇒身体の位置感覚と支持性の向上⇒模倣、二つ以上⇒体幹(軸づくり)と支持力と足底、骨盤7⇒バランスと止まる⇒呼吸の調整
- 自分でする⇒できた感と体感⇒早さよりも確実性

<学級経営と居場所づくり>

- 聴くスキルとルール⇒実行機能の向上のための遊びの学習
- 視覚化とTeach Others



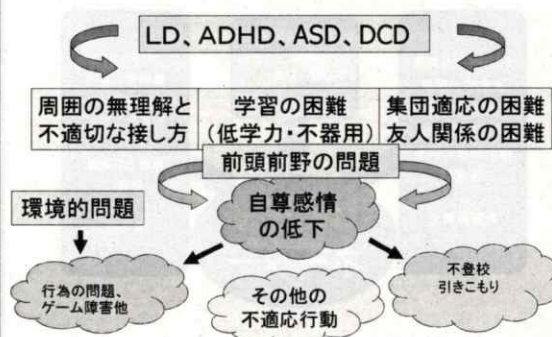
二次障害って何?

- 子どもの困難さを周囲が理解して、適切な対応をしていない
- 本来ある困難さとは別の二次的な情緒や行動の問題が出てしまう
- 心の不安定さが身体機能にも影響を及ぼす可能性も多い
- 発達障害はADHDとLDのように合併しているケースや不適切な関わり方によって派生した別の症状・障害と併存することも多い

二次的障害とは

- 発達障害(一次的障害)そのものではなく、周囲の人たちとの関係の問題から生じてくる様々な心理的問題や適応・行動上の問題
- 自信・意欲の低下、あきらめ、なげやりな態度、孤立、被害感情、周囲の人への不信感や敵意、反抗、暴言・暴力、器物破損、行為障害、身体症状、不登校、引きこもり、せつなな生活 etc
- どの年齢でも生じうるが、特に、思春期以降に大きな問題となりやすい

二次的障害が生じるプロセス



問題のマクロ化

- 個人からクラス全体の関係性へ
- 「どうしたら解決できる」から「なぜ問題に見えるのか」「誰にとって問題なのか」へ
- 子どもは対人関係の歪みの生きにくさを情緒的的症状で示す
 - 入場券、危険信号、問題解決の企図、迷惑事
- 気づきのセンスの向上
 - 障害の有無を発見することではなく子どもの心に近づく

学校の枠組み

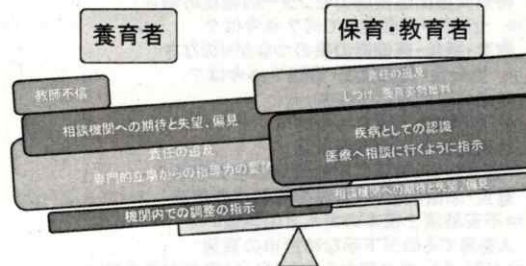
- 秩序
- 黙ってノートに写す
- 黙って聞く
- 整列して校長の話をも黙って聞く
- 職員室に許可なく入らない
- むやみに立ち歩かない
- 「暗黙の了解と意味理解」
- 「指示に従うこと」
- 教師の個人的経験
- 個別でなく集団他

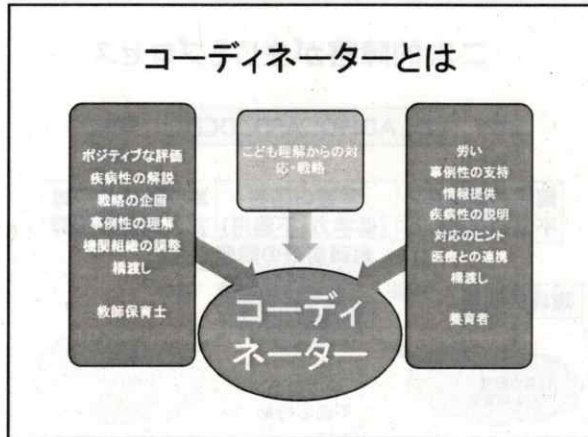
連携

- 非力さに気づいたものが必要とする
- 複数のものが対等な立場で対応を求めて、同じ目的を持ち、連携を取りながら、協力し合い、それぞれの役割を遂行する。対等に近い関係が生じた段階で、多くの課題は消滅する。

(2005 田中)

子ども日常をめぐる悪循環





- ### コーディネーターはそれぞれの地域にあって 教育資源になり得ているのか？
- Mission (使命)・Action (行動)・Passion (情熱)・Smile (笑顔) を持っているか
 - 知識・経験・情報・技術は個別化出来ているか
 - 学際的協働 (trans-disciplinary) は組めているか
 - ネットワーキングは出来ているか
 - 子どもや家族の願いや思いがわかっているか
 - 教師・COの自己実現は出来ているか
 - COの心身のバランスはとれているか
 - お互いの情報は共有出来ているか etc.

教員・管理職に期待すること

今思うこと...

- ### 神戸発！特別支援教育
- 交流教育の先駆け(学校間から個人へ)S56⇒友生、垂水、花谷
 - 養護学校の立地の特徴(S32~)⇒小学校内から利便性
 - 通教指導教室の設置(S45~)⇒早期から言語指導
 - 医療的ケアの先駆け(H2~)⇒教員の専門性とシステム作り
 - 星和台小学校の取り組み⇒リソースの考え
 - 阪神大震災⇒養護学校での安心安全・防災マニュアル
 - 須磨の事件⇒心の教育+実態把握と未然防止
 - 教員補助者と教育的ニーズ⇒大学連携、支援員の先駆け
 - 本山中学校の取り組み⇒LD通級へ
 - こうべ学びの支援センターの設置⇒子ども、教員、学校、保護者支援、専門家育成、連携強化
- 他

- ### その当時の神戸に足りなかったもの
- 特別支援関連機関のセンター的機能の弱さ
⇒ センターの機能って何？⇒今は？
 - 教育・福祉・医療等の横のつながりのなさ
⇒ 委員会・保健福祉・病院？⇒今は？
 - 本当の専門家の少なさ
⇒ 専門家って何？⇒今は？
 - 特別支援教育の理解不足
⇒ 通常教育≠特別支援教育=障害児教育？
 - 震災・須磨の事件・教員の資質への不安
⇒ 不安解消？根本の考え方の間違い？
 - 人を育てるのが下手な神戸市の実態
⇒ どうしたいの？何からすればいいの？が見えない

- ### 今の学校現場?に足りないもの
- なぜ東須磨の事件は起きたのか?⇒これは神戸だけの問題ではなく各地域で分析するべき問題
 - 教育委員会、管理職のリスクマネジメント力の弱さ、甘さ?⇒「Risk(リスク)」と「Crisis(危機)」の違いを知っておく必要
 - 教育界はブラック?⇒公務員ではない教職。お金に換えられないもの。
 - 子ども置き去りの自己養護?⇒何を最優先にするべきなのか。課題解決能力の低さの露呈。
 - 人材育成は?⇒目先の人材育成のつけがきている。
 - 一人のために全員が?⇒ラグビーを見習おう。ワンチームは1日ではできない。

教員や教育委員会には支援の安全性向上と事故防止に努め、万が一事故が発生した場合には責任ある行動をとり、子どもや保護者に何らかの被害を生じさせた場合は、速やかな回復を図ることができる能力が必要になってくる。

事故・事件防止と、より質の高い教育のために、
 ①支援ニーズの把握および客観的な「アセスメント」(教育・生活課題の分析・実態把握)ができる能力と、
 ②リスクマネジメントの基本的視点を涵養することは、人材養成目的において両輪の要素である。

**リスクマネジメント
(未然防止)**

- ・魅力ある施設学校づくり
- ・安心安全の場づくり
- ・ユニバーサルデザイン
- ・的確な実態把握

指導支援対応

早期発見・早期対応
 (情報収集・学級編成・対応
 チーム・専門家の見立て
 他)

自立・学習支援

- ・事後対応
- ・自立・参加
- ・自己肯定感 他

図 未然防止の取り組みの流れ

＜象徴的なメッセージ＞

＜一生懸命頑張っている教育現場の不安と問題点＞

＜通常の学校＞

- ・発達障がいを含めた、配慮の必要な児童の増加
- ・気づき(実態把握)と支援の繋がり(不安とエビデンス)
- ・人手、体制づくり、主体性と研修、学級経営、教師の問題

＜特別支援学校＞

- ・子どもの重度重複化、医療的ケア・発達障がいの高等部在籍数の増加
- ・自立活動と専門性の低さとセンター的機能の低下

＜共通事項＞

- ・教師、管理職、教育委員会の指導力と理解不足
- ・子どもの実態把握の資料準備不足・相談機関の少なさ
- ・保護者との連携と理解不足・インクルーシブと合理的配慮

＜論点1:期待&使命＞
(ミッション、ニーズ、役割、資質)

＜特別支援教育と授業のユニバーサルデザイン化＞

- ・全ての子どもたちが学びに参加。多様な学び方に対し柔軟に対応。教材・教具や環境設定。間違いや失敗が許容。試行錯誤。現実的に発揮することが可能な力で達成感…。
- ・特別な教育的ニーズのある子どもたちへの指導・支援の中にある要素と、通常の学級で培った「どの子にもわかる授業」とされてきた要素を融合させた授業。
- ・子どもたちにとって「わかりやすく」、学習意欲が喚起される授業。⇒「ワクワクドキドキ」⇒現実的に発揮できる
- ・特別支援教育の本質は子どもの実態把握。
- ・実態把握ができなければ授業は成立しない
⇒教師目線の授業づくりと子ども不在

＜論点1:期待&使命＞
(ミッション、ニーズ、役割、資質)

- ・教師は、子どもたちの一人一人のニーズを受け止め、人間として成長・発達させることが大切になる。⇒個別指導ではない⇒指導の個別化⇒一人で子どもを指導できますか？
- ・子どもの実態把握とは？⇒障がいを見つけることではない⇒把握の手立てを増やす、背景が違うことを理解する⇒目に見えない部分を客観的に把握する。
- ・おもしろい内容・おもしろくない内容をいかにおもしろく…⇒やりたい、生きたい、頑張りたい…
- ・特別支援学校の教師として大切なこと⇒**当たり前のことを当たり前にする**⇒子どもの命を預かっていること⇒**専門的な指導ができること**

＜論点2:育てる&動かす＞
(養成、研修、チーム、連携)

＜これからの指導に大切なこと(気づきから支援へ)＞

- ・実態把握⇒集中力して話を聞くことが苦手？ **なぜ**
⇒友だちの意見に関しては興味関心を示すが、教師の説明の部分は集中が途切れ、聞き落とすことがある…(聴記憶、覚醒レベル、発問の不的確さ 他)
- ・予想される困難さ⇒発表をためらうことが多い？ **どうして**
⇒指示内容を聴いていないために、授業の手順がわからずに戸惑っていることがよくある…(この授業において聞く予想をする。)
- ・具体的な手立て⇒個別の声かけをする？ **どのように**
⇒板書やワークシートの手順を再度チェックができるシートを準備する。班内で相互確認させる…。

＜論点2:育てる&動かす＞
(養成、研修、チーム、連携)

＜どうしたら変わるのか＞

- ・成功した事例を研究する⇒自校との比較⇒体感する
- ・温故知新と臨機応変 ⇒先生がかわらないと
- ・誰のために授業をしているのか⇒検証と評価(PlanとOutcome)
- ・個別の指導計画と支援計画の作成⇒作ることから実質化へ

＜主体的研究と連携のために＞

①校長のリーダーシップ ②教員の意識改革 ③アセスメントと教員の努力 ④研修を楽しむ ⑤子どもの変化を実感する ⑥続ける ⑦困ったときの救急車 ⑧保護者理解と対応 ⑨One For All All For One ……

＜育てる&動かす＞

＜それぞれのステージで大切なこと＞

それぞれのステージを大切に

⇒安心安全な施設づくりと人間関係づくり(称賛と感謝)

⇒次のステージへ残さない(二次的な問題の予防と予測)

＜どのような職員になってほしいのか＞

- ・ 目でみる力の獲得(観察力、知識、努力、総合力)⇒知識力
- ・ 手でみる力の獲得(感性(努力)、柔軟性、授業力)⇒実践力
- ・ 心でみることができる人になってほしい(共感、とけあい、受け入れ)⇒感じる力
- ・ 三つの見ると力の育成と今の社会を変える力

校長・教頭の役割とは①

- ・ 学校の中長期目標をたてる
⇒ リーダーシップと目標設定、研修「子ども、教科、領域他」
- ・ 特別支援教育を特別な教育と考えない
⇒メインストリーミング、インテグレーションからインクルージョンへ 子ども、教員を育てる
- ・ 教員を評価、指導、育成する
⇒「何ができて何ができないのか」「適材適所」「評価基準」
管理から笑育へ
- ・ 地域との連携協力を図る
⇒保護者を育てる、地域の中心として位置付ける「おらが町の学校」

校長・教頭の役割とは①

- ・ 学校を育てる
⇒理想的な6年生を育てる、ティーチングコミュニティの形成、中学3年生を案にする、他機関との連携、
- ・ 専門性を高める
⇒プロ集団の形成、プロとは何か、専門機関の活用
- ・ 子どもを知る
⇒特性理解、専門機関との連携、情報収集
- ・ 学校を見る
⇒授業参観、情報収集、「見る」から「視る」、「診る」へ

アセスメント、評価、影のコーディネーター他……

教師に求める力

- ①「目でみる」の獲得
 - ・ これは子供を的確に観察するということになります。その観察を裏付ける知識を学修し、子供を様々な視点で見ようとする努力が必要になります。すなわち「知識力」です。
 - ②「手でみる」の獲得
 - ・ これは子供を指導するときの感性ということになります。様々な障害のある子どもたちを指導するときには手で触って、子供たちの体を動かすこととなります。その時に手の感触をより確かなものにしておかないと間違った、独りよがりの指導になります。そのための努力、柔軟性が大切になります。通常学級では授業展開力にあたります。すなわち「実践力」です。
 - ③「心でみる」の獲得
 - ・ これは子供の悩みや困り観に共感することができる教師になるということです。共感できて初めて子供ととけあい、受け入れることができます。これは人として最も大切な力になります。すなわち「感じる力」です。
- ・ 以上の三つの「みる」と「力」の獲得が今後の教育や教員の意識を変える力につながっていくと考えます。